

『緋文字』における「植物」と「罪」の相関性

～ポロックとの親和性を目指して～

The correlation between plan and sin in *The Scarlet Letter*

尼子 充久*

AMAKO, Mitsuhisa

1 序論

アメリカ文学で最も宗教的な作品の一つとされる *The Scarlet Letter* (1850) で描かれている、アーサー・ディムズデル (Arthur Dimmesdale) とヘスター・プリン (Hester Prynne) の姦通事件が意味するものには、単なる男女の一時の過ちにとどまらず、全人類が各々に持っていると言われるキリスト教的な原罪までもが含まれている。そのことは、第一章 *The Prison-Door* で語り手自らがこのロマンスを「人間の弱さと悲しみの物語」 ("a tale of human frailty and sorrow"⁴⁸) と説明していることから明らかであるが、Nathaniel Hawthorne (1804-1864) は、この「罪」という極めて抽象的な概念を描くために全作品を通じて多くの工夫を凝らしている。特に、『緋文字』のなかでの最大の悪人であるロジャー・チリングワース (Roger Chillingworth) の「罪」の描写には「植物」が効果的に用いられていると思われる。ディムズデルと小部屋に同居してまで執拗に付け回すことによって、心を弄んで体を弱らしていくチリングワースの復讐行為は、雑草が他の植物に絡みつき養分を奪っていく様子を連想させるのである。

2 「黒い花」と「黒い雑草」

第十四章 *Hester and the Physician* で、チリングワースはヘスター・プリンと七年ぶりに半島の人里離れた所で再会した。チリングワースが「葉草」 (herb) を採集している最中にヘスターが話しかけ、ディムズデルに自分のかつての夫が誰であったかを告げることを決心したことを伝え、さらに、ディムズデルを許し復讐行為をやめることを懇願した。それに対して、チリングワースは、自分自身に許す権利は無く、ヘスターの最初の誤ち以後の成り行きは全て必然であり宿命であるのだと言いつつ放ったのであるが、そのセリフの中で「罪」が、その時行っていた植物採集と関連づけられているかのように、「悪の芽」、「黒い花」といったような「植物」に例えられているのである。

By thy first step awry, thou didst plant the germ of evil; but, since that moment, it has all been a dark necessity.... Let the black flower blossom as it may! Now go thy ways, and deal as thou wilt with yonder man. (CE I 174; 下線は論者による、以下同様)

以上に読み取れるチリングワースの全ての因果応報を達観しているかのような宿命論は、「なぜこの世には悪が存在するのか」という永遠の神学上の

* あまこ・みつひさ
埼玉大学教育機構非常勤講師

テーマに対する一つの厭世的な答えであるといえる。植物の一度地に播かれると後は加速度的に成長するという一般的な特徴と罪の捉え方が重ねあわされているのである。

また、第十章 *The Leech and His Patient* で、ディムズデールは雑草が葉に生成される過程を見学するためにチリングワースの実験室を訪れていた。そして、チリングワースが調べている「不気味な醜い植物」(a dark flabby leaf)について尋ねたところ、それは墓地から採取された死人の心臓から生えてきたものであり、「生前に告白しておかなければならなかった罪」の象徴であることを聞かされたのである。

They grew out of his heart, and typify, it may be, some hideous secret that was buried with him, and which he had done better to confess during his lifetime. (131)

この場面でチリングワースは明らかに、ディムズデールのヘスターとの姦通の罪をも暗示しているが、これに対してディムズデールは、その死人は告白したくてもできなかったのだと擁護した。すると、チリングワースは、その「黒い雑草」にさらなる積極的な意味づけをしてディムズデールを追い込んでいくのである。「黒い雑草」が生えてくるのは「自然の力」が告白を望んでいるからだという主張である。

"Wherefore not; since all the powers of nature call so earnestly for the confession of sin, that these black weeds have sprung up out of a buried heart, to make manifest an outspoken crime?"(131)

チリングワースは自分自身の復讐心を「自然の力」

という言葉と巧みにすり替えているのである。なぜなら、ディムズデールが罪の告白をするかしないかの狭間で苦しむことを誰よりも望んでいるのはチリングワースだからである。つまり、この場面での「黒い雑草」は青年牧師の「姦通」という罪のみならず、老医師の「復讐」という罪をも象徴しているのである。

4 植物への「変容」

チリングワースはこの悪魔的な行動を続けることによって容姿が徐々に変貌していくのであるが、その様子がヘスターの目には毒草という植物と一体化して映っているのである。ヘスターは「幻想的な好奇心」(a half fantastic curiosity)に囚われて、前述の会話の後に立ち去っていくチリングワースの姿を見ながら、大地がチリングワースが指をさしたところから毒草を生やすのではないかという奇妙な思いにとらわれたのである。

Would not the earth, quickened to an evil purpose by the sympathy of his eye, greet him with poisonous shrubs, of species hitherto unknown, that would start up under his fingers? (175)

さらに幻想的な思いは膨らんでいき、チリングワースが突然に大地に沈んで姿を消して、そこから気味の悪い植物が繁茂するのではないかとさえ感じたのである。

Would he not suddenly sink into the earth, leaving a barren and blasted spot, where, in due course of time, would be seen deadly nightshade, dogwood, henbane, and whatever else of vegetable wickedness the climate could produce, all flourishing with

hideous luxuriance? (175-76)

以上の箇所からは、ヘスターがチリングワースが毒草を創造することができる、もしくは毒草そのものに変身することができることさえ思っていることがわかる。

さらに、このことはヘスターのみならず、このロマンスの語り手にも共有されている観方である。チリングワースにとってディムズデルは憎悪と嫉妬の対象であると同時に、最大の生きがいである復讐行為の相手として必要不可欠な存在であった。そのために、ディムズデルが物語の最終場面で処刑台上で絶命してしまった後は、日光にさらされて萎れていく「根こぎにされた雑草」のように衰えていったと語り手によって描写されているのである。

All his strength and energy—all his vital and intellectual force—seemed at once to desert him; insomuch that he positively withered up, shrivelled away, and almost vanished from mortal sight, like an uprooted weed that lies wilting in the sun. (260)

5 「文明の悪の華」

第一章 The Prison-Door でヘスターが収監されている「監獄」が、「文明の黒い華」(the black flower of civilized society)と表現されている。ホーソーンが文明を「悪」と捉えている例は多くの短編に見出すことができる。十九世紀アメリカを舞台とした The Old Apple Dealer の中で、産業革命の象徴である、当時発明されたばかりの「蒸気機関車」が「蒸気の悪魔」(steam fiend)、The Snow-Image ではストーブが「赤い目の悪魔」(a red eyed

demon)、Ethan Brand では石灰窯の「炎」から悪魔を呼び出すという逸話が描かれている。火を利用する「蒸気機関車」「ストーブ」といった明らかな「文明の利器」と同様に「監獄」が捉えられているところにホーソーンの独自性がある。「監獄」とは社会の体制派が逸脱者を一方的に閉じこめておくことができる場所、つまり、体制派にとって非常に「便利」な施設なのである。魔女裁判の判事を先祖に持ち、そのことに尋常ならざる罪悪感を抱いていたホーソーンは「監獄」を「悪」と弾劾せずにはいられないのだ。そして、監獄という「文明の黒い華」の飾りであるかのように、その周辺には、「見苦しい植物」(unsightly vegetation)が生えているのである。

3 Plant の二重の意味

医師であるチリングワースが“Doctor”よりも“Leech”という単語で表現されていることには深い意味があることは周知の事実である。Leech には「医師」の他に「ヒル」という意味があり、チリングワースが執拗にディムズデルに付きまとって復讐を続ける様子が、人間の皮膚に貼り付いて血を吸うヒルと類似しているというのである。このようなダブル・ミーニングは Plant という単語にも見出すことが可能だと思われる。Plant には「植物」のほかにも俗語として「罌」や「策略」という意味がある。²チリングワースがしばしば植物採集を行っていることは、治療に必要な薬を生成するためという建前のみならず、その薬によってディムズデルを生き長らえさせて復讐を完遂するという本音があるのである。つまり、チリングワースは「植物」を「罌」として利用しているのである。しかし、第9章 The Leech では、外面上は二人の関係は親密度を増していき、健康維持と植物採集のために海岸や森を一緒に散歩し、自然のささやきを幸せそうに鑑賞しているのである。

For the sake of the minister's health, and to enable the leech to gather plants with healing balm in them, they took long walks on the sea-shore, or in the forest; mingling various talk with the splash and murmur of the waves, and the solemn wind-anthem among the tree-tops. (123)

このような一見美しいロマン主義的な場面に、「植物の畏」というグロテスクなゴシック的要素を見出せるとすれば、それは、世界のパラドックスをしばしば描き出してきたとされるホーソン芸術 (Our Hawthorne is a figure not so much of ambiguity as of paradox and profound contradiction),³ の常套手段と言え、他の作品においても見出すことができる。例えば短編の“Rappaccini's Daughter”のラパチャーニ博士が栽培している人工庭園には美しい紫色の花が咲いている。しかし、この花は猛毒を秘めていてそれに触れる生き物は全て死んでしまうのである。このように、ホーソンが植物に複雑な意味を込めるのには伝記的な要因があると思われる。先行研究によって、ロジャー・チリングワースやラパチャーニ博士のモデルとして、ホーソンの母方の叔父ロバート・マニング (Robert Manning, 1784-1842) が指摘されている。⁴ 「薬草を採取、栽培するチリングワースには、十九世紀のアメリカでは見慣れない草花を数多く栽培して論文まで書いていた園芸業者 (horticulturalist)、叔父ロバートの特性が重なる」、⁵ さらには「叔父に対する作家ホーソンの複雑な感情がチリングワースのディムズデルとの関係に働いているのかもしれない。叔父ロバートのイニシャル R はロウジャーの R でもある」といったものである。⁶

4 Adultery の二重の意味

ピューリタン社会はヘスターに罰として、胸に「姦通」(Adultery)を意味するAの文字の刺繍をつけることを義務付けた。これには、姦通行為の恥を誰の目にも明らかにさせる効果があるが、その結果、ヘスターと常に一緒にいる娘のパール (Pearl)も社会の迫害を受けてしまうのである。パールは露骨に「不義の子」(an adulterine baby)として認知されてしまったのだ。ところで、adulterine という形容詞には「姦通によって生まれた」という以外に「混ぜ物の」という意味があり、動詞の adulterate も「混ぜて品質を下げる」という意味がある。⁷ Leech や Plant と同様に Adultery にも二重の意味が込められていると思われる。例えば、ラパチャーニ博士のグロテスクな庭には、種類の違う植物が博士の天才的な科学技術によって不自然に交配 (adultery)させられており、それらはもはや神の創造物ではなく、人間の墮落した幻想の怪物のようであると描写されているのである。

...there had been such commixture, and, as it were, adultery of various vegetable species, that the production was no longer of God's making, but the monstrous offspring of man's depraved fancy, glowing with only an evil mockery of beauty. (CE X110)

ラパチャーニ博士は現代の遺伝子組み換えにも似た技術によって植物を操作して自然界に本来は存在しえない猛毒を作り出してしまったのである。「庭」はラパチャーニ博士にとって、自分の科学のユートピアを創り上げるための重要な場所なのである。一方、

チリングワースも 17 世紀にヨーロッパ大陸からアメリカに渡ったピューリタンの例にもれず、宗教的なユートピア建設を目指していた。しかし、到着後はアメリカ原住民に捕獲され、しばらくしてからボストンの入植地に連行されて最初に目にした光景は、自分の妻が明らかに他の男との間に作った子供を抱いて処刑台上げられている姿だったのである。この瞬間に夫としての自尊心や宗教的な大義はもろくも崩れ去ってしまったのだ。この絶望的な悲劇はチリングワースを冷酷な復讐者に変容させ、自分だけの悪のユートピアを作ることに向かわせたのである。そして、そのユートピア建設のかっこうの舞台となったのがディムズデルの肉体と精神だったのである。チリングワースは、ディムズデルとの愛のユートピアを作ろうしていたヘスターにむかって、「彼はわたしのものだ」(“Not the less he shall be mine”76)と宣言した。このセリフは、ユートピア建設に必要な土地の取り合いとも解釈できるのである。チリングワースは自身の優れた知性を尽くして青年牧師の内面に入り込んで自由自在に暗躍するのである。その様子は「牧師の内面の観察者から主演男優になった。」(“He became, thenceforth, not a spectator only, but a chief actor in the poor minister's interior world.”140)と描写されているとおりである。そして、チリングワースが主体的にディムズデルの内面で行っていたことは、罪の「交配」(Adultery)であると思われる。姦通の罪と、それを隠しながら敬虔な牧師として振る舞うという罪が「混合」したものから生じる罪悪感がディムズデルを心底苦しめているのである。そして、この八方ふさがりの精神状況こそがチリングワースの復讐欲を満たしているのである。チリングワースは薬を処方することによりディムズデルを生き長らえさせて、牧師としての務めを果たすことが可能な期間をできる限り延長させて、

二つの罪の板挟みにさせているのである。つまり、チリングワースは二つの罪を「交配」させ、より強力なものを作り出すことに成功したのだと思われる。

5 Jackson Pollock との親和性

美術評論家の Clement Greenberg は、Jackson Pollock (1912~1956)の絵画と Poe や Melville や Hawthorne といったアメリカンルネサンスの作家の文学作品との間の共通性を指摘した。ポロックがアクションペインティングという手法を用いて描く絵画とチリングワースやラパチャーニ博士が創り上げた悪の世界には共通性があると思われる。ポロックの絵画には、キャンパスに絵具を垂らすという造形の偶然性が多大に入り込んでいる。

視覚的にも植物の根が無秩序に絡み合っているかのような効果を生み出している。一方、チリングワースの悪のユートピアも、神の必然性が欠落し、ディムズデルの内面の様々な罪が混じり合っていく偶然性を観察するという行為に基づいているのである。つまり、チリングワースはディムズデルの白い胸というキャンパスに悪の絵を描いたのである。

したがって、胸のAの文字が意味するものは、Action paintingのAとも考えられるのかもしれない。

註

1. Bumas, E. Shaskan. *Fictions of the Panopticon: Prison, Utopia, and the Out-Penitent in the Works of Nathaniel Hawthorne*. *American Literature* 73.1 : 121-14, 2001
2. *The Oxford English Dictionary*によると、Plant の八番目の意
味として A scheme or plot laid to swindle or defraud a

person

とある。

3. Emory Elliott. *The Columbia Literary History of the*

United States Columbia University Press, 1988, p.413

4. Gloria C. Erlich, *Family Themes and Hawthorne's Fiction:*

The Tenacious Web. Rutgers University Press, 1984, p.119

5. 丹羽隆昭『恐怖の自画像：ホーソンと「許されざる罪」』（英宝社、2000年） p.125

6. *ibid*

7. *The Oxford English Dictionary*によると、Adulterate の三番

目の意味として、to render spurious or counterfeit; to falsify, corrupt, debase, esp. by the admixture of baser ingredients とある。

引証文献

The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, vol. I, The Scarlet Letter. Columbus: Ohio State University Press, 1968. 本論文における *The Scarlet Letter* の引用はすべてこの版により、ページ数のみ引用の末尾に記す。

The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, vol. X, Mosses from an Old Manse. Columbus: Ohio State University Press, 1974. 本論文における “Rappaccini's Daughter” の引用はすべてこの版により、ページ数のみ引用の末尾に記す。

ホーソン『緋文字』（八木敏雄訳、岩波書店、2010年）本論文における *The Scarlet Letter* の引用部の日本語訳はすべて八木敏雄訳による。